5　十七世紀後半の医学書に見るらい病観

横田則子

昨年度の総会において演者は「初代曲直瀬道三とらい遺伝説について」というテーマで、初代曲直瀬道三の医学書を素材に、近世初期、主要には一六世紀半ばの、らい医学とらいを巡る社会状況について報告した。今回はその続編として、一七世紀後半の医学書をとりあげて報告する。

本報告において参照した医学書を年代順にあげる。

まず貞享三年（一六八六）刊の蘆川桂洲『病名彙解』。桂洲は後世派に属する医師で、朱子学も学んでいる。病因を李梴『医学入門』（一五七五年）にある風毒・湿毒・伝染（遺伝）に求め、「天刑解シガタキ也」と述べる。病型の分類は『準縄』による。

貞享五年刊、岡本一抱『万病回春病因指南』。一抱も後世派に属し、味岡三伯の高弟である。龔廷賢『万病回春』（一五八七年）に依拠して書かれ、『万病回春』がらいを「天刑」の疾とするのをそのまま引く。さらに、らいは「悪疾」「不治」「子孫に伝える」病いであり、京都近郊で「癩者」を「モノヨシ」と称するのは「陰房ノ事強剛」であるからと記す。

同じ貞享期には吉永升庵『阿蘭陀外科明鑑』も刊行される。オランダ流とあるが、内容的には病因も処方も中国医学の範囲を出ない。

元禄三年（一六九〇）刊、『袖珍医便』は前出の蘆川桂洲の書だが、一般向けに書かれた通俗医書である。らいについては、「飲食相反（クヒアハセ）」の項に「鮑魚（ゴリ）ト野鶏（キジ）ト癩病ヲ生ス」と記すにすぎず、当時の医学水準を大衆に還元するような内容にはまったくなっていない。

元禄四年刊、牛山丹跡子広正『癩瘡秘方』は、不治の病として、「親ヨリ子ニ伝」、つまり遺伝によるらいをあげる。また処方の中に初代曲直瀬道三には見られなかった大風子をあげている。

元禄六年（一六九三）の苗村文伯の序文がある『俗解龔方集』は通俗医書であるが、前掲『万病回春病因指南』同様、『万病回春』に依拠して書かれている。したがってらいを「天刑ノ疾」と位置付けるが、欲望を断ち、飲食を清淡にすれば十に一、二は治るとする。

元禄一一年刊、馬場幽閑『食物和解大成』も通俗医書である。前掲『袖珍医便』同様、「食物食合類」に「鮑魚猪ノ肉・雉ノ肉ト同ク食ヘバ癩トナル」とある。また「諸疾禁好物」の項に「癩風好物」と「同禁物」を列挙する。

この時期の医書からは、後世派の祖たる初代曲直瀬道三が主張しなかったらいの遺伝説が、後世派を含みつつ広範に登場し、定着していったようすをうかがうことができる。またここでは詳述しないが、「天刑」という考え方も、中世の宗教的業罰観とは異質な側面を含む。らいを性的放逸と結びつける偏見も含めて、これらの考え方はこの時期に新たに登場したものであり、かつ以後も近世一貫して確認できる。いわば一七世紀後半は近世的らい病観の形成時期と位置付けられよう。

報告においては右のような医学書の記述を、当時の社会状況とも関連させながら分析することとする。

（立命館大学研修生）